



ひが やすお
比嘉 康雄
(1938年 - 2000年)

作品名: 「情民(1) - 1 うみんちゅTさん」

- 制作年: 1970年代後半 ●材質: ゼラチン・シルバープリント
- 寸法: 21.0×15.7 cm

B52墜落事故をきっかけに警察官をやめて写真の道へ進んだ比嘉は、東京の写真学校時代に『生まれ島・沖縄』で自分自身の周辺を見つめなおし、その後琉球弧の祭祀世界に魅かれ、丹念に取材し撮り続けていきました。

本作は祭祀世界を取材する傍らで、移民からの帰省者や海女、ハジチ(いれずみ)をした老女等様々な沖縄の海辺に住む人々を撮った「情民」シリーズの中の1点で、表情や背景からは被写体の内面が浮かび上がってきます。

県立博物館・美術館
開館記念展開催中!



<http://www.museums.pref.okinawa.jp/>



1970年代—世代わりの中で

1972年に本土復帰した沖縄では、海洋博覧会や「730(ななさんまる)」の交通変更を経て、アメリカ占領時代から主体性を求めながらも急速に日本化への道を突き進んでいきます。その時代の変化を捉えてきた写真家たちの中から、東松照明と比嘉康雄を紹介します。



とうまつ しょうめい
東松 照明
(1930年生まれ)

作品名: 「宮古島 1971」

- 制作年: 2001年(1971年撮影) ●材質: ゼラチン・シルバープリント
- 寸法: 33.8×25.8 cm

日本を代表する写真家の一人である東松は、1969年に初めて沖縄を訪れてから現在に至るまで沖縄を撮り続けています。特に復帰前後には沖縄本島や宮古島で2カ年程生活をし、アメリカ占領下に置かれながらも「アメリカ化」していない沖縄と独自の文化をみつめていきました。

本作には沖縄の風景や気候が写し出されているながらも、若さの持つ一瞬の輝きがとじ込められています。見る人によって自分の現在の位置との距離を考えさせられる作品です。

ミユウ ジュアム

美ら島
まるごと

第9回

沖縄を撮る

沖縄は戦前から、木村伊兵衛や土門拳等本土の様々な写真家たちによって撮られており、それは東松照明等戦後も続いていきます。人や時代によって撮られる対象は変わっていきませんが、眼差される視点が常にありました。一方で戦後になると、沖縄写真部や沖縄写真連盟の創設があり、比嘉康雄や平良孝七らはそれらに一定の距離を取りながらも独自の視点で沖縄を捉えていきます。時代状況に鋭く反応していく比嘉豊光や石川真生等、沖縄の状況を受けて沖縄の人身が自分たちの周辺をみつめ、沖縄を撮るようになります。